

能登を憶い、能登に学ぶ

太田浩史

自分に厳しくありたいと願うとき、親鸞の求道的な姿があり、疲れて安らぎをと思うときには蓮如の姿がある。…二人の関係はあたかも厳父と悲母である。(西山郷史『蓮如と真宗行事』六三頁)

第1章 令和六年能登半島地震

正月一日、日本の元旦はおだやかに明けました。北陸の家々では都会から帰省した子供や孫と、老夫婦がお寺と神社にお参りし、おせち料理を食べながら楽しい時を過ごしました。過疎化で寂しくなった村々も、過去のにぎわいを取り戻したように、明るく華やいで見えました。午後4時13分、そうした人々の幸福が突然の地震で一変しました。最初の揺れがおさまって数秒して、もっと強烈な震動が襲いました。陸地に沿って150km にわたって海底が裂け、石川県・富山県・新潟県の広い地域で損害が発生しましたが、震源地の石川県能登半島では特に揺れがひどく、すぐに津波がきて人々は逃げまどい、崩れた家の下敷きになった人を火災が襲い、さらに雪が降って、生き埋めになった人を凍死させました。志賀原発も大きな被害を受けましたが、幸い調査のため運転を止めていたので、フクシマのようにならなくてすみました。能登半島では1993年と2007年に前触れとなるような地震がありましたが、今回のような大地震はまったく予測されておらず、数千年に一度の出来事とされ、政府は志賀原発の再稼働をあきらめていません。それは原発を運転しないと国のCO2基準を守れず、経済的な打撃が大きいと考えているからでしょう。

能登には400あまりの寺がありましたが、ほとんどがつぶれるか、重大な損傷を受けました。それらの寺々のうち、70パーセントが大谷派の寺で、被害をうけた人の大半は大谷派の門徒でした。真宗大谷派はかつてないほどの打撃を受けました。物質的にもそうですが、何よりも能登にはユニークで模範的な真宗門徒の生活文化がありました。私たちは能登の人々の尊い生活について学び、共感することを通して、能登の念仏を応援したいと思います。

第2章 地震と原発

能登には蓮如上人の弟子が開いた寺が多く、上人の影響が日本でも一番強い「蓮如の生きる土地」です。能登で損害の大きかった都市のひとつ珠洲市にある西勝寺の西山郷史住職(1947～2022)は著書の『蓮如と真宗行事』に能登のことを「蓮如の底流に重層的な歴史が積み重なり、抑圧を感じる何かのにおりに蓮如の頃のエネルギーが噴出する、そういった土壌」(36頁)と書いています。能登の原発反対運動もそれに通じるものがあると思います。三十年前珠洲市の高屋地区と寺家地区にフクシマ第一原発の2倍以上の原発基地をつくる計画が電力会社から発表されたとき、高屋地区の真宗大谷派円龍寺の塚本真如住職と門徒が中心になって、市役所に座り込むなど